

令和4年度大村市歴史資料館企画展

荒木十畝

会場 歴史資料館 企画展示室 期間 令和4年6月18日(土)～7月10日(日) 10:00～18:00

作成 大村市歴史資料館



双美

1929 (昭和4) 年以前

六曲一双 紙本彩色

一对の孔雀と大輪の白牡丹が描かれた屏風。雄のクジャクは上尾筒を閉じた姿だが、作品の大きさも加わり迫力がある。昭和4年に弟子の西沢笛畝が編集した「十畝花鳥集」に所収されている。孔雀は師の荒木寛畝も描いた画題で、十畝も画業前半期に「岩頭孔雀図」を描いていることから、伝統的に描かれた題材だったと見られる。



松鷹図

1928(昭和3)年

紙本彩色 上久原町内会所蔵

昭和天皇即位の御大典(昭和3年11月)の記念として、上久原在郷軍人班の依頼を受けて制作され、熊野神社に保管されていた作品。

鳥を画面中央に大きく配置するスタイルは、晩年の十畝の作品に多く見られる。

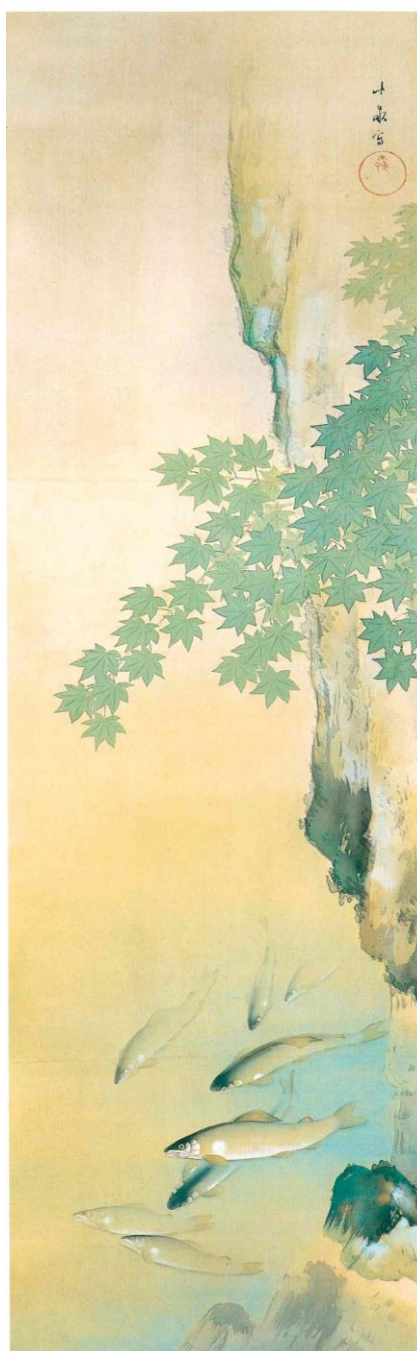


初夏双鶏図

年代不詳

絹本彩色

2羽の鶏と、朝顔やトウモロコシやナスなどの夏の植物の作品。朝顔を見上げる雌の鶏と、その様子をうかがうような雄の鶏が描かれている。



四季花鳥 夏

年代不詳

絹本彩色

夏を表す題材である清流に魚の群れと、若紅葉が描かれた作品。

旧大村藩主の大村家に伝わったもの。



朝

1924(大正 13)年

紙本彩色

大正半ばまでの鮮やかな作品に比べ、墨を基調にぼかしの表現を用いた幽玄な作風に転じている。第5回帝国美術院展覧会(帝展)出品。



柳と五位鷺

1936(昭和 11)年頃

紙本墨画淡彩

下方を見つめる五位鷺の一瞬の様子を切り取ったような作品。緻密に描かれている部分と、流れるような筆運びで描かれた部分があり、メリハリが見られる。

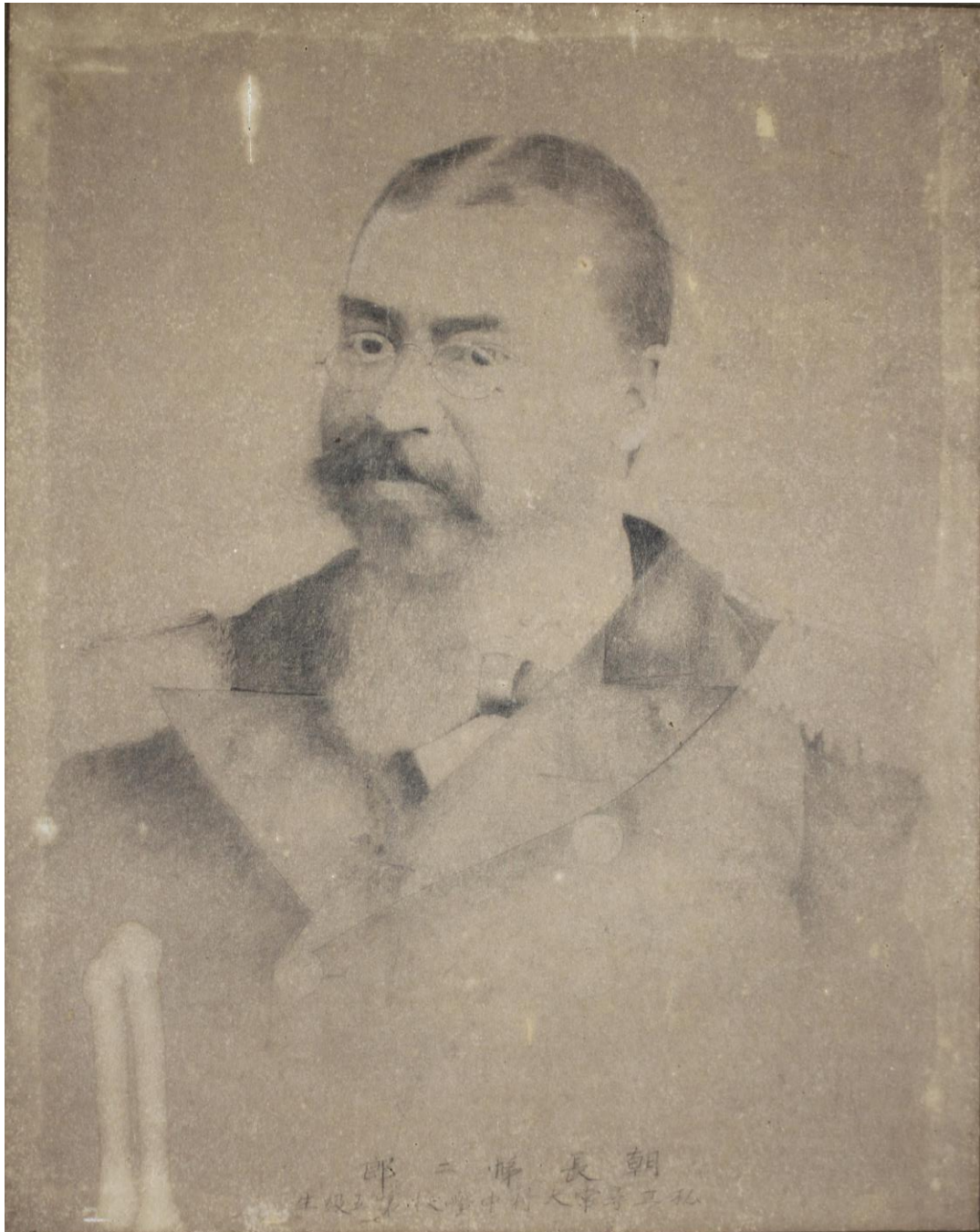


南国花鳥図

1936(昭和 11)年頃

紙本墨画淡彩

十畝は 1931(昭和 6)年のタイにでの日本美術展に出展し、タイからインド、南洋諸島を歴訪した。「南国花鳥図」は実芭蕉と見られる葉にとまる鳥が描かれ、訪ねた南国での取材を反映し制作されたと考えられる。



人物素描

1887 (明治 20) 年

紙本鉛筆

下部に「朝長^{ていじろう}二郎 私立尋常大村中学校 第五級生」とあり、十畝が同校の1年生(15歳)の頃に描いたものと見られる。5年制の尋常大村中学校(現在の県立大村高等学校)を4年で中退した悌二郎は20歳で上京し、後に「荒木十畝」と名乗り戦前の日本画壇で名を馳せた。この素描は、師荒木寛畝の花鳥画手法を会得する以前のものである。

1989(平成元)年に練馬区立美術館の「荒木十畝とその一門」展で展示されたあと、その所在は把握できなくなっていたが、令和2年度企画展「荒木十畝」を機に所有者から当館に寄贈された。大村市では今回が初公開となる。



朝顔

1935 (昭和10)年8月4日
紙本彩色

つるを伸ばし多くの花を付けた姿で描かれることが多い印象の朝顔だが、この1枚は鉢植えの状態が描かれている。十畝の作品には、鉢植えの朝顔を描いた夏の画も存在する。



習作 キュウリ

1932 (昭和7)年8月11日
紙本彩色

花を付け長く伸びたキュウリのつると、半分熟した実を描いたもの。
野菜や果物を描いた作品は「^{まきい}蔬菜図」と呼ばれる。



習作 なすび

1932 (昭和7)年8月18日
素材 紙本彩色

ハリのある茄子の実だけではなく、花やへたの部分も複数の方向から観察されている。描くために対象を知るといふ基本的な姿勢を教えてくれる1枚。



鮎

年代不詳
紙本彩色

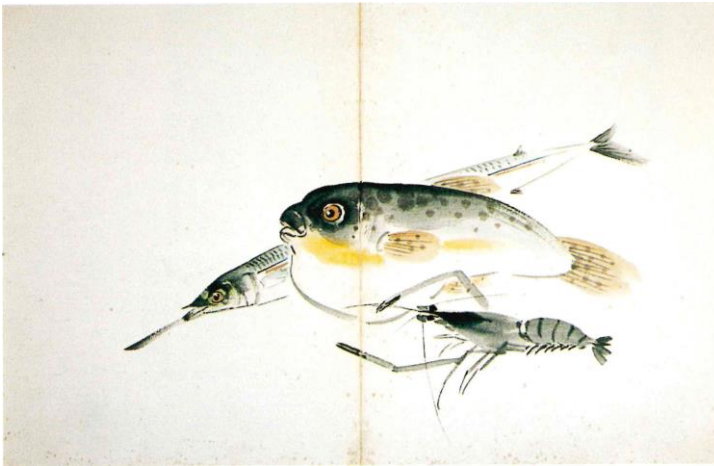
十畝の夏の作品には魚も多く登場する。
清流に群れを成す鮎の姿が涼しげな作品。



瀧

年代不詳 紙本墨画
個人蔵

花鳥画で知られる十畝だが風景を描いたものも残している。
これは流れ落ちる滝を描いた作品。



海の幸 / 鯉 すいちく 「酔竹画帳」所収

(1923 (大正12)年11月)

紙本彩色

【海の幸】サヨリやフグ、エビを描いた1枚。食材として集められたのであろう一群だが、澄んだ魚の目やぴんと張ったエビのヒゲが新鮮さをうかがわせる。

【鯉】「鯉の滝のぼり」と言うように、ぼくか瀑布を泳ぐ鯉の姿は立身出世の象徴として描かれる。一方、この鯉は穏やかな流れの中に身を置いている。

花鳥画を得意とした日本画家

あらき じっぼ
荒木 十畝 (朝長 悌二郎)

1872 - 1944

1872 (明治5)年、東彼杵郡大村の久原 (現 大村市久原2丁目) に旧大村藩士・朝長兵蔵の次男として生まれる。旧制大村中学校に進学し、当時すでに「琴湖」の雅号で制作をしていた。

1892 (明治25)年に旧藩士である貴族員議員・渡辺清を頼り上京、渡辺から同じく議員である野村素介を介し、日本画の名門である荒木寛畝に弟子入りした。

師である荒木寛畝の娘・鈴と結婚し荒木家を継いでからは「十畝」を名乗っている。



時代と主義

明治政府の近代化政策のもと、日本画家たちは西洋文化至上主義のなかで不安定な立場にあったが、1887年頃から西洋化一辺倒の政策に批判の声が高まり、近代日本画の在り方が再考されるようになった。

伝統的日本画の継承を重視した保守派と、日本画の改革を図る急進派が対立するなか、十畝は伝統を継承しつつも新しい日本画の構築を目指す「守旧漸新主義」を掲げた。

作風

1915年、師である寛畝が亡くなった。十畝は寛畝流の余白美を活かした伝統的な様式や画風を受け継いでいたが、師の死後、自らの理想とする花鳥画を追及し、装飾的で極彩色な世界へと作風を変化させ、当時の画壇において花鳥画の十畝としての位置を確立した。

その後、「東洋画は精神的で西洋画は物質的である」との考えから、『朝』『牡丹』のような明暗濃淡描法を生かした幽玄で精神性の高い作風へと変化させた。

著作

十畝の活動の軌跡は、近代日本画の歩みと方向を同じくしながらも、自らの「守旧漸新主義」の道を進み、象徴主義的な世界に終着した。1942年に上梓した著作『東洋画論』では、そのような活動の展開をした十畝が会得した技法や芸術的理念について述べている。

「東洋画は精神的で西洋画は物質的である」とした由縁についてもここで触れ、東洋画と西洋画について、太陰暦と太陽暦に基づいた視点と思想の違いから解釈している。

大村市の荒木十畝コレクションの形成

旧大村市立史料館の荒木十畝作品所蔵第1号は、1984(昭和59)年に市内上久原町内会から寄託を受けた昭和天皇御即位を祝う作品『松鷹図』だった。続いて市内八坂神社から『猫牡丹』の寄託を受けた後、しばらく十畝作品の所蔵数に変動はなかったが、1989(平成元)年に東京都練馬区立美術館で開催された「荒木十畝とその一門」展で当時の大村市長・松本崇が、大村市でも十畝作品の収集と展示をしたい旨を伝えたところ、永福寺(東京都)の御住職の耳に入り、1993年に『朝』の寄贈を受けた。

この動きを受け、1997年に絵画作品や日本画家としての十畝を表す資料のみならず、十畝という近代の大村の先人を形成した資料を対象とした、当館の荒木十畝コレクションの収集活動が始まった。

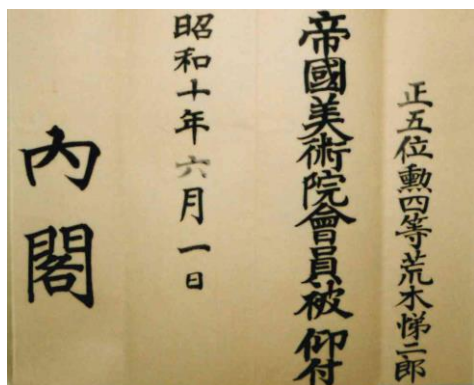


永福寺関係者寄贈の十畝
模画『鳥羽僧正筆』卷子

永福寺は、大正12年に関東大震災で被災した十畝が一時身を寄せた寺である。

特に1999年には、東京在住の十畝の御子孫から約900点もの関係資料が寄託(後に寄贈)されるという、当館のコレクションを濃密にする出来事があった。その多くはモチーフの細部に迫ったものや作品として昇華するための習作や粉本であり、十畝の作品制作の前段階や過程をうかがい知れるものである。また、この資料群には師である寛畝や同門の作、十畝が受けた帝国美術院などの会員任命書、日本美術協会などの賞状、軍からの感謝状などが含まれており、日本画家・荒木十畝を形成したもののや、画家としての活動の片鱗を示すものとして貴重な一群となった。

以後、大村市では引き続き十畝関係資料の寄贈・寄託を受け入れ、収集を継続している。



1999年寄贈 帝国美術院会員任命書



1999年寄贈 絶筆『柏白鷹』下絵カ